

# わたしたち市民のハンセン病問題 高校生からのメッセージ

朗読者 今村敦子

「もういいかい 骨になっても まあだだよ」

これは、ハンセン病患者として療養所で生涯を過ごした中山秋夫さんの川柳です。全国のハンセン病療養所内の納骨堂には今も、引取り手のない多くの遺骨が眠っています。感染力は弱いにも関わらず、ハンセン病の患者は、今は廃止された「らい予防法」という法律によって強制的に一般社会から隔離され、生涯二度と家族や友達に会うことも許されず、亡くなっても遺骨さえ故郷へは戻れませんでした。患者は家族への差別を恐れ、偽名で一生を送ったのです。

広島県にある私立盈進学園高校の人権について考え行動しているヒューマンライツ部は、20年に渡り長島愛生園というハンセン病療養所の方たちと交流を続けています。平成30年7月、副部長・後藤泉稀（みずき）さんは、福岡市人権啓発センターが主催するセミナーで、その想いを語りました。後藤さんは、「間違ったことをしたのは国だけでなく、国の言うことを鵜呑みにして、心に差別を宿した私たち市民の責任もある」と主張します。後藤さんは中学一年生の頃、法務大臣賞を受賞した作文で、「すべての人が人間らしく生きるためには、流されず差別にNOと言うべきだ」と主張しました。

そして高校生になった今、夢を抱くようになりました。「今も全  
国の療養所に眠る1万6千650柱のお骨をすべて家族と故郷に返  
すこと」。そして、「すべての骨壺の偽名を本名に戻し、永遠に刻  
むこと」。後藤さんは、「ハンセン病問題を学ぶ」ではなく、「ハ  
ンセン病問題から学ぶ」と言います。その学びはハンセン病問題だ  
けにとどまらず、様々な活動を通し、多くの人々に、「周りに流さ  
れず、差別にNOと言える生き方」を考えるきっかけを作ってくれ  
ています。

高校生たち若い世代からの大切なメッセージを受け止めたいです  
ね。